



ピースデポ 平和資料協同組合

Peace Depot (Peace Resources Cooperative)

会報

No.23

2008.12.15

発行人：湯浅一郎／住所：〒223-0062 横浜市港北区日吉本町1-30-27-4 日吉グリーン1F
TEL:045-563-5101 / FAX:045-563-9907 / E-mail:office@peacedepot.org
郵便振替：00250-1-41182 特定非営利活動法人ピースデポ
銀行口座：横浜銀行日吉支店 普通 1561710 特定非営利活動法人ピースデポ

日本平和学会平和賞 受賞報告

ピースデポは 「日本平和学会平和賞」 を受賞しました



2008年10月25日 授賞記念集会 於:立教大学

ピースデポは6月、第2回「日本平和学会平和賞」を受賞しました。日本平和学会(会長：遠藤誠治成蹊大学教授)によって2年に1度授賞されるこの賞は、以下の趣旨で設立されました。「日本における平和研究、平和運動において大きな貢献をした団体および個人の功績を称え、平和運動、平和研究のいっそうの活性化を期し、日本平和学会平和賞・平和研究奨励賞が設定されました」(「日本平和学会」ホームページ www.psj.org/modules/tinyd0/index.php?id=4に全文)。

第2回の今回は、梅林宏道(ピースデポ前代表(現・特別顧問))およびピースデポに平和賞が、高橋博子さん(広島市立大学広島平和研究所)に平和研究奨励賞が、それぞれ授賞されました。

6月14日、東京女子大学(東京都杉並区)で行われた日本平和学会2008年度春季研究大会にて授賞式が行われ、梅林と湯浅一郎(ピースデポ代表)が出席しました。

10月25日には、立教大学(東京都豊島区)にて、「第2回日本平和学会平和賞・平和研究奨励賞記念関東地区研究集会」(主催：日本平和学会関東地区研究会、共催：環境・平和研究会(日本平和学会環境・平和分科会)、グローバルヒバクシャ研究会(日本平和学会グローバルヒバクシャ分科会))が行われ、梅林と田巻一彦(ピースデポ副代表)が出席し、記念講演を行いました。梅林は「ピースデポが目指してきたもの」と題する講演で、現在のNPO法人ピースデポの前身である「平和資料協同組合」立ち上げ当時の振り返りや、日本の市民社会において核軍縮・安全保障問題に関する「市民の手による平和のためのシンクタンク」としてのピースデポのこれまでの活動の軌跡を、「これからの日本の市民の活動においても示唆に富む一つのモデル」として紹介しました。続いて、田巻は「インド洋給油問題の顛末と意義」の講演の中で、ピースデポの10年来にわたる調査・研究活動が目に見える成果として結実した、07年の

第2回平和賞 授賞理由

2008年6月14日 第2回日本平和学会平和賞選考委員会

核軍縮をめぐる調査・提言活動、機関紙「核兵器・核実験モニター」およびイアブック「核軍縮・平和」の刊行。特に、2007年における、海上自衛隊のインド洋での給油活動に関する重要な瑕疵を明るみに出すきっかけとなった調査活動。

日本の反核運動は、世界でもまれな草の根的広がりを持続性を示してきた。しかし他方では、党派的分裂や戦争体験への素朴な寄りかかりの中で年中行事化＝形骸化という問題をも抱えてきた。これに対し、ピースデポは、欧米に見られるような高度な専門性と政策提言能力を備えた自立的な市民運動組織の形成をめざして結成され、すでに10年以上に及ぶ活動実績を蓄積してきた。その功績は、梅林宏道会員に帰せられる。(略)

ピースデポの10年余にわたる活動実績のもつ意義とは、単なる調査研究型の軍縮NGOの誕生というにとどまらず、日本においてはじめて本格的な市民的平和運動を樹立した点にある。

しかし、なお、ピースデポはその活動の志と質の高さにもかかわらず、「市民」的なものを容易に受け入れない日本社会の中であって、幅広い市民に対するインパクトという点で困難を抱えてきた。ピースデポの機関紙創刊10周年にあたり、ある平和学会員は「平和運動はよく種火にたとえられる。それ自身では大きな火にはならないが、いざ火を燃やそうとすると、重要な役割を果たす。ピースデポの地道な活動と蓄積は、いずれきっと広い世間で必要とされるときが来ると思う」とコメントを寄せていた。昨年、ピースデポは、インド洋での給油問題という、国政上の重要案件を揺るがす形で、その価値を世に知らしめることになった。こうして、調査・研究活動と平和運動の有機的結合の開花という点で、梅林宏道会員およびピースデポは、第2回日本平和学会平和賞にふさわしい貢献をなしたと評価される。

インド洋における自衛隊による米艦船への給油の実態を明らかにした活動について語りました。

国会の議論にまで波及しうる情報をつかみ、世に出していくためには、その情報がたとえすぐに必要でなくても、地道に調査を続け、適切な時局で世に明らかにすることが必要です。その意味で、「授賞理由」の中で引用されていた次の言葉は、私たちにとってこの上ない励ましでした。「平和運動はよく種火にたとえられる。それ自身では大きな火にはならないが、いざ火を燃やそうとするとき、重要な役割を果たす。ピースデポの地道な活動と蓄積は、いずれきっと広い世間で

必要とされるときが来ると思う」。

記念集会の最後に「市民のための公文書：米国立公文書館の原爆・核兵器関係資料」と題する講演をされた高橋博子さんもまた、市民による地道な活動が社会の変化をもたらす可能性についてお話をされました。

今回の授賞は、これまでの活動を支えてくださった会員の皆様や、日々の活動を支えてくださる一人ひとりのお力の結果です。この場をお借りして厚く御礼申し上げますとともに、今後とも、ピースデポへのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

広島・長崎の記録 —学生ボランティアの視点から—

今年も8月の広島・長崎に、ピースデポ理事、スタッフとともに、首都圏の数名の学生さんが同行しました。彼らは各地での様々なイベントに精力的に参加し、集会でのピースデポの書籍販売でも活躍してくれました。さらには、その経験を発展させ、自らの大学でヒロシマ・ナガサキを伝える個性的な企画を展開しました。



明治学院大学
図書館での原爆展



永井淳一郎さんの
被爆体験を聴いて

ピースデポ広島・長崎ツアーに参加して

杉坂 知紘 (明治学院大学国際学部4年)

今回、ピースデポの皆さんとともに広島・長崎ツアーに参加できたことを心より嬉しく思っております。戦後63年がたち、日々めまぐるしく変化する社会(05年の大学入学以来、私の学年が上がる度に首相が交代しています)の中で、今回の経験は私自身の大きな糧になると思います。08年の夏、22歳の私が見聞きし、体験し、思ったことをありのままに書きます。

私たち学生5人は、8月4~7日に広島に、8~9日は長崎に滞在しました。私は8・6、8・9の広島・長崎は初めてで、この時期の広島・長崎には「慌ただしさ」がありました。国内外から集まる多くの人々や常に開かれているシンポジウムで、自分の中で情報を整理できず、街自体もさばき切れていない印象でした。何よりもイメージとのギャップが一番印象的です。テレビで見る式典の印象とは全く違い、厳かさだけではなく人々の熱気に溢れていました。

シンポジウムや様々な企画で多くの事を学びました。被爆体験を聴いたり、被爆者の方の老人ホームを訪問させていただく機会もありました。田巻さん、中村さんの講演にも参加させていただきました。お二人のお話は分かりやすく(そしてカッコよく!)、横浜にいれば身近な事も違った場で聞くと改めて勉強になりました。書籍販売をしていると、「若いね、頑張ってる!」。色々な方にこの言葉をかけていただき、言葉とともに、「次の世代」への期待をかけていただいたように思います。私たちは戦争を体験した人々から次の世代へと真実を伝えるパイプの世代です。今回、国内外から広島・長崎に集まる何万もの人を見て、たくさんの仲間がいることを知りました。そして人々のパワーを知りました。私が感じたイメージとのギャップは熱気や活気といった人々が平和を希求するパワーの表れでした。暑い夏。熱い熱い人々。熱い熱い熱いパワー。PEACEの元集まる人々、その力は無限大です。PEACE!!

次の世代を担う者として、私たちにできること

横山 美奈 (明治学院大学国際学部4年)

広島・長崎ツアーに参加した私たちは、この経験から学んだこと、感じたことを一人でも多くの人と共有し、ヒロシマ・ナガサキや核問題に関心を持つきっかけを提供したいと考え、ツアーに参加した学生が主体となり、原爆展を企画しました。

協力してくれる仲間を募ったところ、8月にニューヨークとインドでヒロシマ・ナガサキに関するイベントに参加した学生と、私の所属するPeace☆Ringという平和問題に取り組むサークルが企画の趣旨に賛同し、協力を申し出てくれました。

私たちはこの企画を「原爆2週間」と名づけ、11月4日の原爆展スタートを皮切りに、7日にインド、ニューヨーク報告会、12日に被爆者講演会、14日に広島・長崎報告会と、17日に原爆展を終了するまでの2週間で、4つのイベントを明治学院大学の戸塚キャンパスにて開催しました。

講演会、報告会、にはそれぞれ20名程度の参加がありました。決して多くはありませんが、それぞれの会で意見交換が行われ、私たち自身も新たな気付きを得ることができました。

最も印象に残っているのは、図書館での原爆展です。開催期間中の入館者数は約8,000人で、これに匹敵する人たちが写真を見たこととなります。また、設置していたコメントノートには、学生に限らず、大学職員、学外の方から「原爆の惨状を初めて知った」「核兵器は無くさなければならないと思った」という趣旨のコメントが残されており、今回の企画の目的をある程度果たすことができたのではないかと思います。

今回、私たちを「原爆2週間」開催へと動かしたのは、ツアーを通して出会った人々たちからの期待や激励の言葉でした。「学生として、次の世代を担う者として、私たちに何ができるのか?」という自分たち自身への問いかけの一つの答えが今回の企画開催でした。これに留まることなく、今後もこの問いへの答えを追求していきたいと思ひます。



イアブック「核軍縮・平和」2008

好評発売中!!

08年8月25日発行の08年版イアブック。

年をまたいでもまだまだ鮮度は落ちません。世界の核軍縮・平和問題から自治体、NGO、市民の取り組みまで、多岐にわたるトピックを掲載しています。まだお持ちでない方は、座右にぜひご一冊。さらに周りの方々にもお広めください!

お近くの図書館へのリクエストや、10冊程度の預け売りにもご協力を!

監修: 梅林宏道

企画・執筆: ピースデポ・イアブック刊行委員会

発行: NPO法人ピースデポ

発売元: 高文研

◎ 会員価格: 1,500円

◎ 一般価格: 1,800円
(ともに送料別)

→ ご注文・お問い合わせはピースデポまで

FAX: 045-563-9907

メール: office@peacedepot.org

2つのシンポジウムを開催しました

◆ 「日豪イニシアティブで核軍縮は進むのか」

～オーストラリアの運動から考える～

11月28日 @渋谷区勤労福祉会館(東京都渋谷区)

今年6月、日豪政府主導で誕生した「核不拡散・核軍縮に関する国際委員会」(ICNND)の「NGOアドバイザー」に任命されたティルマン・ラフさんに、豪の運動側の視点や日豪共通の課題と戦略についてお話をいただきました。



ティルマン・ラフさん
Tilman Ruff

◆ 「核軍縮・不拡散議員ネットワークの活動のいま」(PNND日本・サポートグループとの共催)

12月4日 @全国町村会館(東京都千代田区)

世界70か国500人以上の国会議員が参加する超党派の「核軍縮・不拡散議員連盟(PNND)」グローバル・コーディネーターのアラン・ウェアさんに、活動の最新状況をお話をいただきました。



アラン・ウェアさん
Alyn Ware

2つのシンポジウムを通じての考察

インタビュー 渡邊 浩一 (中央大学院生)

初めまして。私は、2008年8月からピースデポの事務局でインタビューをさせていただいている渡邊浩一と申します。事務局では主に、PNNDの文書等の翻訳作業と発送のお手伝いをしております。今回は、ティルマン・ラフ氏、アラン・ウェア氏をお招きして開催された上記2つのシンポジウムに参加する機会をいただきましたので、ここでその報告をいたします。

両シンポジウムを通じて痛感したことは、現状を打破するためには道徳的なリーダーシップと政治的意志が不可欠であるということです。近年、「核兵器のない世界」や「核兵器禁止条約」という概念が国際社会に浸透してきているものの、一部の核技術を有する国家は、依然として核兵器の獲得及び保持が政治的に有効なツールであると考えているように思われます。国際社会の願いとは裏腹に核兵器国と非核兵器国との間の溝は埋まらず、核軍縮と核不拡散をめぐる対立が核兵器禁止条約や包括的核実験禁止条約の発効を妨げる大きな要因となっているのが現状です。

それでは、このような状況で私たちにできることは何でしょうか。これは、政治的意志を核兵器廃絶の方向に向けるためにはどうすればいいのかという問題ともつながります。もちろん国や地域によって状況が異なりますので、ある一つの明確な手法が存在するわけではありませんが、少なくとも、国際レベル・国内レ

ルの双方において、市民社会からのアピールを継続することが重要です。とりわけ日本においては、広島・長崎発の市民運動が発行に行われている一方で、多くの国民は核兵器廃絶と自分たちの生活との関係が希薄であると考えているさらいがあります。これは、政治的無関心につながりかねない非常に恐ろしい傾向です。

どんなに大規模なキャンペーンもごく小規模の運動から始まるものです。そして、一人ではできないことでも大勢の賛同を得て訴えることによって、必ずや政治的意志に影響を及ぼすことができるはず。そのためには一人でも多くの市民に核兵器の問題に関して当事者意識を持ってもらうことが必要であり、私たちの活動が世の中を変えることができるということを信じ、諦めずに根気強く活動を展開していくことが大切であると思います。

最後になりましたが、今回このような貴重な機会を提供してくださったピースデポ並びにPNND日本サポート・グループの皆様とすばらしいご講演をしてくださったティルマン・ラフ氏、アラン・ウェア氏に御礼申し上げることで結びに代えさせていただきます。

【編集後記】今回は誌面構成から編集まで一連の作業を初めてやりました。大変でしたが無事完成させ、ほっとしています。原稿を寄稿していただいたみなさんや、拙い私を支えてくださったスタッフに感謝しています。そして何よりもいつもピースデポを支えていただいている会員や関係者のみなさまに感謝の意をお伝えします。(塚田)

- ① 「核軍縮、一助に」 NPOが年鑑 各国の機密核戦力 図解で示す (朝日新聞、08年9月26日)
- ② 「核軍縮・平和」年鑑を発売 NPO法人「ピースデポ」 (毎日新聞、08年9月13日)
- ③ 「核の傘ある限り韓半島の非核化に限界」 北東アジア非核化の「3+3構想」提案 (韓国・ハンギョレ新聞、08年11月21日)
- ④ 「G8下院議長会議開催に寄せて『非核』の約束実現に期待 核保有国が「広島」知る契機」 (毎日新聞、08年8月31日)
- ⑤ 「非核地帯が平和の道 緊張高める迎撃構想 イージス艦再寄港 識者らに聞く」 (高知新聞、08年5月26日)
- ⑥ 「ルポ'08 艦影ふたび 軍事利用調査で寄港か」 (朝日新聞、08年6月5日)

② **核軍縮・平和 年鑑を発売**
NPO法人「ピースデポ」が年鑑「核軍縮・平和2008」を発売した。湯淺一郎代表は「核軍縮の状況を正確かつ迅速に理解でき、どんな取り組み方が効果的かを考える基礎



軍事利用調査で寄港か
艦影の向
「艦影の向」は、北東アジアの非核化を推進するNPO「ピースデポ」が、各国の機密核戦力を図解で示す年鑑「核軍縮・平和」を発売した。湯淺一郎代表は「核軍縮の状況を正確かつ迅速に理解でき、どんな取り組み方が効果的かを考える基礎

20年9月26日



① **各国の機密核戦力 図解で示す**
NPO法人「ピースデポ」(事務局、横浜市)が、核兵器をめぐる世界の最新情勢をまとめた年鑑「コアブック 核軍縮・平和2008」を出版した。08年に初刊し、これで10冊目。ピースデポ代表で、刊行委員会代表を務めた湯淺一郎さん(88)は「市民が世界の動向を正確に読み取り、核軍縮に向かって行動する助けになれば」と願う。(加戸靖史)

08年版「コアブック」はA5判294頁、07年1月から今年3月までの出来事や海外の核の実情について、ピースデポのメンバーと外部の研究者ら14人が分担して執筆した。軍事機密として各国が明らかにしていない核戦力の現状を図解で書き出しているのが特色の一つだ。各国の核弾頭保有数を07年版と比べると、米国の削減後も貯蔵してきた弾頭の大半削減に踏み切る一方、中国が弾道ミサイルを増やし、08年版の最大のニュースは、米国で、シユルツ、キック

シンジャー 西元國務長官ら要人4人が07年1月と08年1月の2回、「核兵器のない世界」を求めた提言を連名で発表したことだった。ピースデポ代表の梅林宏道さん(71)は巻頭に記した「概観」の中で、提言が欧米の指導者に影響を与えた可能性を指摘し、「核廃絶を目指す道の灯火になりうる」と評価した。そのうえで、実効性を高めるには「市民社会の関与」が必要だと強調した。ピースデポは「市民の手による平和のためのシンクタンク」を目指して07年に結成された。会員約6000人、ただで済む海外の情報収集力を入れ、月2回発行の情勢と年1回の「コアブック」(02年までは別名称の小冊子)の形で発信してきた。湯淺さんは発刊当初からピースデポの活動に当たり、今年3月に梅林さんから代表を引き継いだ。10冊の年鑑を読み返すと、「核軍縮に対する人類の努力が刻まれている」と感じるという。コアブックには、国際条約や国内法で核兵器禁止に踏み

「市民が核軍縮に取り組むための資料になると思う」と話す湯淺一郎さん(広島市中区)

③ 「 핵우산 있는한 한반도 비핵화 한계」 동북아비핵화 위한 '3+3 구상' 제안



「한반도 비핵화하는 목표를 달성하는 데는 북한의 비핵화만 중요한 게 아니다. 미국의 핵군축과 핵평화를 하는 것은 미국 핵무기에 의존하는 일본과 한국에 안보정책 전환도 마찬가지로 필요하다」
일본 외무省の北朝鮮問題担当官、菅野洋子氏は「北朝鮮の核兵器は、東アジアの安全保障にとって重大な脅威である」と述べ、北朝鮮の核兵器を廃絶するよう求めた。菅野氏は「北朝鮮の核兵器は、東アジアの安全保障にとって重大な脅威である」と述べ、北朝鮮の核兵器を廃絶するよう求めた。

④ 「非核」の約束 実現に期待 核保有国が「広島」知る契機

「G8下院議長会議開催に寄せて」
NPO「ピースデポ」湯淺一郎代表に聞く
「非核」の約束 実現に期待
核保有国が「広島」知る契機

艦影の向
梅林 宏道氏
緊張高める迎撃構想
非核地帯が平和の道

核保有国が「広島」知る契機
「非核」の約束 実現に期待
NPO「ピースデポ」湯淺一郎代表に聞く

「G8下院議長会議開催に寄せて」
NPO「ピースデポ」湯淺一郎代表に聞く